

〈会員の広場〉

平成 27 年度エンプロイヤビリティ研究会活動報告

エンプロイヤビリティ研究会

1. 研究会活動報告

事務担当 斯波薫

① 発起人

委員長 西山勝裕 (UEJ 会員)、副委員長 山内康義 (UEJ 会員)、事務担当 斯波薫 (UEJ 会員)

研究会メンバー 杉本信一 (UEJ 会員)、水野英和、川口哲廣

② 活動実績

4 月 7 日 発起人会開催

5 月 19 日 第 1 回研究会

- ・エンプロイヤビリティの概念
「労働移動を可能にする能力」
+ 「当該企業の中で継続的に雇用されることを可能にする能力」

- ・長編事例「それぞれの青嶺」第 3 話 (西山勝裕)

6 月 20 日 第 2 回研究会

- ・短編事例①中高年 (川口哲廣)
- ・短編事例②ミドル層 (川口哲廣)
- ・長編事例「それぞれの青嶺」第 1 話 (西山勝裕)

7 月 18 日 第 3 回研究会

- ・「グローバル時代を生きる職業能力養成教育」 (山内康義)

2013 年 10 月 UEJ ジャーナル第 13 号

<http://www.uejp.jp/journal/j13.html#>

- ・長編事例「それぞれの青嶺」第 2 話 (西山勝裕)

9 月 21 日 第 4 回研究会

- ・研究資料をもとにした意見交換会

題材：『シニアに向けてのキャリア開発についての一考察』研究員 森加緑

平成 27 年 6 月 一般社団法人 中高年雇用福祉協議会 PREP 研究所

9 月 30 日 青山学院大学 経営学部兼大学院経営学研究科 山本寛教授 訪問

10 月 31 日 第 5 回研究会

- ・短編事例①中高年 (水野英和)
- ・短編事例②シニア・60 歳以降の再就職 (水野英和)
- ・長編事例「ある生涯現役 南川雄二の事例」 (西山勝裕)

11 月 28 日 第 6 回研究会

- ・話題提供 (ス波薫)

『Works No.91 「年の功」再発見 シニアが急増していく組織活性化法を模索する』

2008 年 12 月 リクルートワークス研究所

(https://www.works-i.com/publication/works/backnumber/w_91)

製造業の未来について

- ・人材業界の最新動向について (ス波薫)

『ミドルのチカラ』

2014 年 1 月 一般社団法人 人材サービス産業協議会

(<http://www.j-hr.or.jp/research/>)

ミドルマッチフレームと厚労省の動き

- ・話題提供 (西山勝裕)

「死ぬな就活生、内定ゼロでも逆転ある 暇な女子大生さん」

2015 年 7 月 朝日新聞デジタル

(<http://www.asahi.com/articles/ASH7J6GVQH7JUEHF00V.html?ref=newspicks>)

12 月 19 日 第 7 回研究会

- ・これまでの 6 回にわたる研究会における意見交換の内容をデータ化し、
エンプロイヤビリティに関する内容「28 項目 633 アイテム」を抽出

1 月 16 日 第 8 回研究会

- ・エンプロイヤビリティ 28 項目のうち、2 大項目である「経験、実績、体験」
「専門性、スキル」について検証、633 アイテムのデータをカード化し、
意見交換を実施

2 月 26 日 第 9 回研究会

- ・エンプロイヤビリティ 28 項目の残りの項目について検証
633 アイテムをテーマごとに再検証

3 月 26 日 第 10 回研究会

- ・テーマごとにエンプロイヤビリティ向上に役立つ要素分析、新たな視点の発掘、
・カードから導き出せる考え方等について議論実施

2. 総括

委員長 西山勝裕

①15 年度の活動からの意見

1) 平成 27 年 6 月 20 日に本会が実質的に発足。本日まで 10 回の会合は順調に進展。目標『実務家コンサルタントからの提言』(KJ 法によるケーススタディの纏め)は、633 枚のカード化が完了し、7 月には第 1 報の報告書が出来上がる予定である。

2) 上記作業からの現在浮上している課題。課題として変化の激しい時代におけるエンプロイヤビリティとして、「変化への対応」(大～中分類カード)への見解を、何らかの形で示す必要が生じてきた。

参考文献：Oxford 大学オズボーン准教授論文「The Future of Employment」(10～20 年後にアメリカの総雇用の 47%が computerisation リスクにさらされると予測)

3) キャリア理論として 2) の事実とは別に、キャリア形成の 80%は「Planned Happenstans」(計画化された偶然性)で決定されていると主張するクランボルツの理論(99 年)が有力になっている。目標は決めない、その時々チャンスを生かす、とする理論である。

②今後の課題

1) ケーススタディのカード化の纏めを完成する。

2) 専門家のキャリア理論を調査し、これからの「中高年のエンプロイヤビリティ」と「Planned Happenstans」理論への評価を作成したい。この際これまでご支援を頂いてきた青山学院大学の山本寛教授にもご指導を仰ぐこととしたい。

以上